一般社団法人
日本ELVリサイクル機構

JAERA News Letter
Dec/25/2009 No.26

2009年度JAERA全国地域別講習会の実施について

前号では本年度のJAERAインストラクター研修会につき実施概況を報告しましたが、それに引き続き、現在、研修を受講したインストラクターを講師とする地域講習会が全国各地で開催されています。
（当機構ホームページ http://www.elv.or.jp/ よりバックナンバーをご覧になれます。）

11月末現在、既に31箇所での講習会が終了し、年内には残りの7箇所、年明け早々に一箇所で開催される予定で、合計39箇所で実施されることになります。地域講習会は、原則的にはインストラクター研修会と同じ内容ですが、研修会で関係協力機関派遣講師が行ったものを、地域講習会ではJAERAインストラクターが行うもので、インストラクターの皆さんにはさぞかし緊張のひと時であったことでしょう。

今回の講習会では、新たな試みとして、多くの地域でJAERA未加入の許可解体業者も対象とし、推定約100名ほどの未加入企業からの受講者があったものと思われます。機構の対外PR活動の一環としても大変意義深いものであったと思われ、機構の会員増強活動の今後に少なからぬ好影響が表れてくるものと大いに期待されます。また、いまひとつの新たな試みとして、各開催地域の自治体（主に、業許可更新の申請先）に働きかけ、講習会への参加をお願いしたところ、土日開催が多かったにもかかわらず、多くの地域で担当官にご出席いただきました。機構会員の適正処理推進に向けた取り組み姿勢を示すよい機会になったものと思われます。

今や、機構のメインの事業に育った感のあるインストラクター研修会と地域講習会ですが、担当するRT部会並びにインストラクターの皆様には敬意を表するとともに、更なるご努力と智恵をもって、より有効な事業として発展させていただくことを願ってやみません。

栃木県自動車リサイクル協議会（三枝透会長）主催による
地域講習会　12月5日　佐野商興会議所にて

～トピックス～

マレーシアの新聞によると、同国政府は、自動車国家政策の見直しに際して、輸入中古自動車に対する開放政策を改める方針を発表しており、２０１５年以降は中古自動車の輸入が禁止される。また、中古自動車部品の輸入に関しても、２０１１年以降は禁止する旨発表した。同記事によると、ムスタファ通産大臣は、この措置は、同国が「ゴミ捨て場」と化することを防ぐ手立てであると述べている。また、自動車国家政策では、古い車から順次スクラップ化する計画を推進することとしており、手始めに、車齢１５年以上の車両については道路税納入時に使用適性検査（一種の車検）を実施することを発表している。また、別の新聞によると、同国サバ州の中古部品販売業者は、本発表に対し強く反対しており、「本制度の導入により、中古部品の需要が特に大きいサバ州では、車両の盗難が急増するであろう」と警告している。

～インタビュー～

去る10月7日から10日までの4日間、米国ケンタッキー州レキシントンで開催された全米自動車リサイクラー連盟（ARA）の年次総会には、全米から約８００名の自動車解体業者が参加し、他にも、カナダ、欧州、オーストラリア、日本などからも参加がありました。その中の一人、オブザーバーとして出席された日本生産性本部エコ・マネージメント・センター室喜多川和典室長にお話を伺いました。

・ARAとはどんな団体ですか？

（喜多川）1943年に設立された世界最大の自動車解体業の団体です。会員は、直接会員がおおよそ1,000社、地域の同業組合を通じて2,000社以上が加盟しており、更に、カナダ、オーストラリア、欧州などからも参加しているか解体業者もいます。

（参照：http://www.a-r-a.org/index.asp）

・今回の年次総会の様子は如何でしたか？

（喜多川）今回で 66 回を迎えるということでした。そこには、急速に発達したアメリカのモータリゼーションとともに歩んだ連盟の歴史の重みを感じさせるものがあります。アメリカには、サルベージ会社を含めて約７千の解体業があるといわれていますが、そのうちの約３千社がARA に加盟しており、唯一の全米規模の業界団体ということができます。

今回の総会は、出展ゾーンとプログラムゾーンに分かれ、出展ゾーンでは、各種機器メーカー、ネットワークシステム運営会社、サルベージ会社、リサイクル業者、部品サプライヤー、教育コンサルタント、シュレッダー業者、損保など約 60 社が参加していました。プログラムゾーンでは、ARA の各種委員会、従業員教育プログラム、エアバッグ処理訓練、電子システム利用、家族経営のノウハウ等々、幅広い分野にわたる会議、講演会が開催されていました。

特徴的であったのは、何れのセッションも、ビジネスに直結する内容を取り上げていたことです。日本や欧州の同様会議では、ともすれば、法制度の遵守、環境保護、環境技術開発などがテーマとなり、ビジネスは二の次といったものが多いが、今回の ARA 年次総会ではビジネスに始まりビジネスに終わるようなところがありました。

家族経営に関するセッション風景

・アメリカの自動車解体業の最近の状況は？

（喜多川）ARA の推定によると、年間売上高 250 億ドル（2兆円強）で、産業規模では米国第16位に位置しており、約 10 万人が従事しています。年間の処理台数は、金融危機以前で約４７０万台と発表されており、アメリカの保有台数規模からすると少なすぎる感じがしますが、話によると、相当数の高齢車がメキシコを始め中南米に流れているのが実態のようです。

・ARA の環境への取り組みについて？

（喜多川）色々な取り組みがあるようですが、そのうちの一つに「ゴールドシール」制度があります。これは、1994 年から始まった制度で、ARA が独自に定めた環境認証基準をクリアした参加企業に ARA から認証書（ゴールドシール）が与えられるもので、一般社会に対し、業界が環境を守り自動車をリサイクルしていることを訴え、環境を軸とした業界のイメージ作りに役に立っているそうです。現在、ARA の会員は、既にほとんどがゴールドシールを受けていると聞きました。（以下次号）

メキシコ事情　～その2～

メキシコ政府に対する技術支援活動の一環として、同国における「使用済自動車の処理に関する国家計画」策定に日本政府が協力することとなり、本誌「編集子」が、事前調査団に参加したことは前号で述べたとおりです。現地滞在中は、主に、先方政府ならびに関係者との協議に時間をとられ、肝心のフィールド調査に時間が割けなかったことが残念ですが、いくつかの施設を視察することが出来たので、そのときの状況をお話します。先ず見学したのは、メキシコシティー郊外にあるシュレッダー施設。当初、現地情報ではメキシコにはシュレッダー施設は「ない」ということであったのが、初日のリサイクル事業者団体へのヒアリングで、数箇所の設備があり、その一つがシティーから程近い場所にあるというので、翌日早速現場に向かいました。混雑したシティーを抜け、外輪

7千馬力もシュレッダー

山（メキシコシティーは大規模な火山の火口にできた沼沢地を埋め立てて出来た街で、四方を山に囲われた盆地にある）に近い工業団地にその施設がありました。大手電炉メーカーが所有する設備で、生産するスクラップは全て親会社の電炉に供給されています。

主軸7千馬力というフィンランド製の巨大なシュレッダーマシンが設置された構内には、鉄道の引込み線もあり、製品はその日の内に貨車で電炉に搬送されます。破砕残渣は、サイズ別に3種類に選別されたミックスメタルと非金属（これがSRと思われる）に分けられ、ミックスメタルは中国、インド等へ輸出されているとのことでした。

投入原料は、廃車ガラが25%とのことでしたが、現場を見る限り、ダストの量が極めて少量であり、廃自動車や廃家電等はほとんど投入されておらず、むしろ、鉄屑、建設廃材等が主な原料となっていると思われました。約8時間稼動で、スクラップの生産が日当たり千トン前後とかなり大規模な設備で、国内には、これほどの規模ではないにせよ、他に10箇所程度の設備がある模様です。

問題は、多少とも投入される廃自動車がどこから来る↗

積まれた廃車ガラ（ソフトプレス?）

↘のか、一部は自社で集荷し、前処理（解体？）をして投入するとのこと。確かにソフトプレス状あるいはサイコロ状のガラを見かけましたが、そこに至る解体工程がどうなっているのか、結局不明のまま今回の調査を終えることになりました。日本で見られるような、車両引き取り→解体・適正処理→破砕→残渣処理といった流れが見えなかった今回の調査ですが、国家計画策定に際しては、その辺を明らかにし、全ての関係者（ステークホールダー）がそれぞれの役割を果たす仕組みづくりが必要となってきます。

解体業者とおぼしき工場

郊外を車で走っていると、写真(上)のような光景を目にします。また、路上で解体している光景(次ページ右上)にも出くわしました。さらに、店頭に中古部品を所狭しと並べた店(次ページ左下)もあります。これらがいわゆる「解体業者」なのかどうか、よく分かりません。メキシコ政府の関係者に聞いても明快な返答はなく、みんな異口同音に「危ないから近寄らないで」という始末。確かに、路上に降りて写真など撮っていると、中から出てきた人に睨まれる始末。実際に如何なる業態なのか、将来関係者としてリサイクルシステムに組み込むことが出来るのか、これからはジグソーパズルを作り上げるような作業が待っている予感がしました。メキシコにおける廃棄車の平均車齢が24年以上とも聞きました。毎年、かなりの数の車が、↗

路上での解体風景

中古部品商の店頭

↘ 国境を越えてアメリカから流れてくるそうです。日本のリサイクルシステムに慣れた目で見ると、何がなんだか分かりません。果たしてこの国に自動車リサイクルシステ↗ ↘ ムの構築が可能なのか・・・これからの大きな課題を目の当たりにした見学会でした。（続き次号）◀

～業界周辺～

まだある不適正車両の出品

これらの写真は、最近某オートオークション会場で撮影されたものである。明らかに事故車で説明資料には「エンジン、シャーシ、足回り取り外し」と記載されており、シートで覆われた車両前半分は無残な有様で、到底再生可能とは思われない。現在進行中の自動車リサイクル法↗ ↘ の見直し議論においても、オートオークションには、中古車とは思えないような車両が出品されている事実が指摘され、審議の焦点の一つとなったばかり。オートオークションの本来目的である、適正な中古車流通手段の提供とはかけ離れ実態が未だ続いている。かかる車両の出品を受け入れるオークション主催者の猛省を促したい。◀

編集後記

激動の2009年も間もなく終わろうとしています。「政権交代」、「事業仕分け」、「脱官僚」などが本年の流行語大賞トップテンに選ばれたことからも、政治的な変化の年であったことが先ず頭に浮かびます。その他のトップテンを列記しますと、「子ども店長」、「新型インフルエンザ」、「派遣切り」、「草食男子」、「ファストファッション」、「ぼやき」、「歴女」等が選ばれています。某自動車メーカーのCMに登場した清史郎君に癒された方々もおられたでしょう。その他を見ると、覇気なくゲーム遊びにうつつをぬかす「草食男子」が増える中、歴史に関心を抱く「歴女」が増えていることが窺えます。安価で手軽な「ファストファッション」に押されて悲鳴を上げている業界もあるようです。経済回復の足を引っ張るデフレ懸念の一因とも言われており、一般市民としては歓迎していいのかどうか迷うところ。「新型インフルエンザ」に脅かされ「派遣切り」に慄くものにとっては「ぼやき」しか道はないのでしょうか。
かくして、さえない一年が終わろうとしています。厳しい冬も、その先に春が来ることがわかっているから乗り切れるどおり。
果たして、来年は明るい春がおとずれるのか、せめて、お正月には英気を養い、力強く新年を迎えたいものです。

本号は、たまたま海外関連の記事が多くなってしまいました。今後は、なるべくバランスよい紙面つくりに努力してまいります。
また、読者各位からのお便りを掲載したいと思っており、皆様の積極的なご投稿を期待しておりますので、奮ってお寄せください。

皆様がよいお年をお迎えになるよう、心より祈念いたしております。（編集子）

一般社団法人 日本ELVリサイクル機構 [JAERAニュースレター]
発行日：2009年12月25日　発行所：〒105-0004 東京都港区新橋3丁目2-2　一美ビル5F　TEL.03-3519-5181／FAX.03-3597-5171